

めでいかすどる
Médicastre



「 草紅葉とエゾオヤマリンドウ 」

鶴岡地区医師会

20年 9月号

『 やさしい分子遺伝学入門 ～美白遺伝子～ 』

山形大学医学部皮膚科 教授

鈴木 民夫 先生

ヒトの色素として、ヘモグロビン、カロチノイド、フラボノイド、メラニンなどが知られていますが、最も重要な役割を担っているのはメラニンです。メラニンは複雑な組成を持つ高分子化合物であり、生体高分子化合物の中でも際立った特異性を有しています。つまり、溶媒に不溶性であり、構造が不規則であり、加水分解により単量体に分解するのも困難です。このような特異的で複雑な構造ゆえに、メラニンは光の吸収と発散、フリー・ラジカル補足、熱の保持などの多様な機能を持つことが知られています。このメラニン合成に関わる研究は、近年急速な発展を遂げております。ここ 15 年間にメラニン合成に関わる分子が次々に明らかにされ、その数は 100 種類以上といわれています。メラニンはメラノサイトのメラノソーム内で合成されます。メラノソームはメラニンを合成、保持する唯一の細胞内小器官であり、最終的には近隣のケラチノサイトに受け渡されます。このメラノソーム内でメラニン合成に直接関わっている分子をはじめ、メラノサイトの細胞質やエンドソームに局在し膜輸送を介してメラノソームの生合成、あるいは成熟に必須とされる分子、さらにはメラノサイトの発生、分化に特異的に関与する分子が明らかにされてきました。これらの分子の遺伝子異常は、程度の差や他の随伴症状の有無の違いはあるものの、結果としてメラニン合成異常をもたらす、臨床的には色素異常症をもたらします。そこで、色素異常症の診断確定、予後推定、そして病態解明、将来に向けた新しい治療法の開発のためには原因遺伝子の特定が必要であります。

日常診療の中で色素異常症の患者様を診る機会がありましたら、山形大学皮膚科の方にぜひ御一報ください。遺伝子診断の可否を含めて診断のお手伝いをさせていただきます。

地域医療連携部門紹介

湯田川温泉リハビリテーション病院

外来・病床管理室 富樫 好子

地域医療相談室 渡部 はつせ

鶴岡地区医師会の皆様、こんにちは。いつも大変お世話様になっております。

入院の前方支援を担当しているのが病床管理室です。

病床管理室の体制は、病床管理室長の看護部長の下で、看護師2名が外来と中材を兼務しながら、外来の一角で入院と外来リハビリの調整を行っております。

当院は回復期リハビリ病棟が 81 床、医療療養病棟が 39 床、全 120 床のリハビリ病院です。回復期リハビリ病棟の入院対象者は、脳血管疾患・脊髄損傷等の発症からと、大腿骨・骨盤・脊椎・股関節・膝関節の骨折の発症または手術後と、外科手術・肺炎等の安静による廃用症候群の手術後または発症後 2 ヶ月以内の患者さんです。療養病棟は、重度の障害のため医療的処置とリハビリを必要とする患者さんが入院対象です。

平成 19 年度の実績は病院と診療所から、入院が 556 名、外来リハビリが 23 名、MRI 共同利用が 742 名でした。ご紹介をいただきありがとうございます。

入院または外来リハビリご希望の患者さんがいらっしゃいましたら、まず外来（病床管理室）までお電話いただき、情報をお聞かせください。迅速な調整を心掛けたいと思います。ご紹介お待ちしております。

入院の後方支援は地域医療相談室で行っております。

地域医療相談室のソーシャルワーカーは現在 3 名体制で、回復期リハビリ病棟と医療療養病棟ほぼ全員の入院患者さん・ご家族さんとかかわり、入院中の生活から退院後の生活までの一連の支

援と、外来患者さん等のさまざまな相談業務を行っております。相談室では院内スタッフ間はもとより、患者さんやご家族さんと病院との間に立って、介護保険や支援費制度等社会資源の活用の際に地域医療機関、介護サービス機関、行政関係、さまざまな方々の連携窓口となれるように努めております。また退院調整としてご自宅に伺う退院前訪問の調整や同行、各関係者の方との担当者会議の調整と参加など、よりよい在宅生活が出来るように具体的な支援を行っております。

最近では胃ろう・留置カテーテル・在宅酸素・気管切開・吸引等の医療依存の高い方の在宅退院も増えており、退院支援時医師会の先生方との連携も行なわせていただいております。

今後も住み慣れた自宅で自分らしく生活して行きたい方々をチームで支援できるように連携を深め、患者さん、ご家族さんの気持ちに寄り添った援助に心がけたいと思っております。

これからも地域との連携を大切に、入退院調整を行っていきたく思いますので、どうぞ宜しくお願い致します。



庄内プロジェクト：あたたかい街、鶴岡

鶴岡地区医師会

会長 中目千之

1. はじめに

皆さんもご存知のように、高齢化にともない2人に1人ががんになり、3人に1人ががんで亡くなる時代をむかえました。がんで亡くならないためには、もちろん、早期発見、早期治療が一番であり、そのためには毎年のがん検診受診がかかせません。しかし、たとえ早期がんであっても、再発、転移はあります。また、がんが発見されたときにすでに進行がんで、しかも転移がある状態で見つかるときもあります。このような場合は、その後の人生は、ときにがんと闘い、ときにがんと共存するということになります。その過程では、がんによる痛み、精神的苦痛、不安、人生の邂逅など、多くのことが織りなされ、紡がれて、人生の終焉をむかえることとなります。がんの患者さんが、がんと診断された段階から、その最後にいたるまでかかわっていくのが、がん緩和ケアです。がんの患者さんの多くは住み慣れた自宅での終焉を望んでいますが、現実には病院で亡くなっています。当地区では、平成19年度厚生労働科学研究費補助金、第3次対がん総合戦略研究事業「緩和ケアプログラムによる地域介入研究」の対象地域に選ばれ、通称「庄内プロジェクト」として、今年の4月から本格的に始動しております。その目的はがん患者さんが、その人生を住み慣れた鶴岡の街で、住み慣れた自宅で、最後まで充実した日々をおくれるように、がん患者さんにとって、やさしい街鶴岡、あたたかい街鶴岡をつくっていく、という街づくりなのです。この理念のもとに、具体的には表1に掲げた内容が本プロジェクトの目的になっています。

2. 「庄内プロジェクト」における庄内病院の役割

庄内プロジェクトに遂行するにあたり、庄内病院では、はじめに緩和ケアサポートセンターを設立、ついで緩和ケア外来を立ち上げました。

さらに、緩和ケア退院支援・調整フローといって入院から退院にむけて、さらに退院後の在宅治療への円滑な移行を目的としたシステムを作りました。このなかでもっとも重要なのが退院支援調整会議です。

この会議は、がん患者さんの退院にあたって、その後の在宅緩和ケアをはじめとする在宅医療、自宅での生活のありかた、また急変時の対応等につき、

本人、家族、病院主治医、病院担当看護師、薬剤師、在宅主治医、訪問看護師、ケアマネジャー、サポートセンター職員、MSW等の多職種の人たちが一同に介し、話し合い、在宅での療養生活を可能な限り、本人や家族の希望通りに行えるように、また支えあえるようにしていく会議です。また、患者さんの情報を共有するために「私のカルテ」を活用することもおこなわれております。

3. 「庄内プロジェクト」における在宅主治医の役割

庄内プロジェクトにおいては、開業医の先生方を中心とした在宅主治医の参加、働き、役割は最も重要であり、かなめでもあります。それは本プロジェクトが在宅緩和ケアの普及を目指しているからです。我々、開業医は、これからはがん患者さんの在宅での療養生活、在宅緩和ケアなどに対し、地域医療を行う一員として、積極的にかかわっていかねばなりません。しかし、がん患者さんの在宅死にむかって、開業医一人で立ちむかうものでもありません。在宅緩和ケアは地域で、チームでおこなうものだからです。在宅緩和ケアのキーパーソンである訪問看護師、サポートセンター、サポートチーム（後述）、緩和ケア外来、ケアマネジャー、薬剤師等多くの職種の人たちからなるチームで在宅緩和ケアは実施されていくからです。

本プロジェクトにおける在宅主治医の主たる役割は、1. 退院支援調整会議への出席。2. 緩和ケア困難時、緊急時の対応方法の取得；サポートセンターへの相談、緩和ケア外来の利用、サポートチームへの相談。3. 緩和ケアスキルアップへの取り組み：スキルアップ講習会への参加、症例検討会への参加。4. 24時間365日往診体制の確立：グループ診療の形成。5. 多職種間でのITによる患者さんの情報の共有：Net4Uの活用（庄内プロジェクトの患者さんは原則的にNet4U登録をおこなっています）。

4. 地域緩和ケアサポートチーム

庄内プロジェクトには、地域緩和ケアサポートチームをつくり、活用することが義務づけられています。その主な任務はコンサルテーションと出張緩和ケア教育です。コンサルテーションとは、在宅主治

医から症状コントロールなどがうまくいかないときに、メール、電話、ファックスなどで相談があると、それに対する確に助言をし、さらに要請があれば、在宅主治医とともに往診をして、専門的対応に関する情報、技術提供を行うものです。ただし、患者さんからの直接の往診依頼には対応せず、あくまでも在宅主治医の要請のもとで、在宅主治医に同行する形のもので、サポートセンターに電話していただければ、サポートセンターからサポートチームの先生と連絡をとって、対応にあたります。

出張緩和ケア教育は、要請に応じ、医療機関や施設等へ赴き、講演、実地指導、困難事例の相談等をおこなうものです。現在は、鶴岡協立病院の高橋牧郎、高橋美香子両先生と、本間（ハローナース）と石川（きずな）両訪問看護師がこのサポートチームを担当しています。

(図1)。

5. 鶴岡市民への緩和ケアに関する情報提供と啓蒙活動

在宅緩和ケアは家族の受け入れがあって、初めて成立します。したがって、市民のひとたちの在宅緩和ケアに関する理解、不安解消等が在宅緩和ケア普及のために大変重要になってきます。この点に関しても、本プロジェクトではいろいろな義務があり、在宅緩和ケアに関する市民の理解の向上をはかるために、リーフレット、ポスター、DVD等を配布したり、いろんな企画を催すことになっております。今年は11月に俳優の石坂浩二さんを鶴岡にお招きして、講演がおこなわれます。

6. 現在の活動状況

平成20年7月末現在、16名の患者さんが本プロジェクトに乗って在宅緩和ケアに移行しました。荘内病院事例7の患者さんにおきましては、自宅に帰られたあと、家族の一人ひとりに以前から考えていた思い出の品物を手渡して、そのあと静かに息をひきとったそうです。まるでドラマをみているような最期だった、庄内プロジェクトにはいってよかった、という家族の声をお聞きしました。すべての症例でうまくいくわけではないでしょうが、少しでもレベルの高い環境を作り上げていくことが我々の使命ではないでしょうか？

現在、庄内プロジェクトのなかには、5つの委員会があります。退院支援・調整プログラム委員会（委員長：鈴木聡先生）、地域緩和ケアサポートチーム委員会（委員長：高橋牧郎先生）、マテリアル普及・啓発活動委員会（委員長：長谷川伸係長）、IT活動委

員会（委員長：三原一郎先生）、調査・登録・評価委員会（委員長：中目千之）の計5委員会で、必要に応じて、会議を開き活動をしています。

7. さいごに

先月の全体会議からは、薬剤師さんもメンバーとして参加しております。また、退院・支援調整会議にはケアマネジャーも出席することからケアマネジャーの間でも庄内プロジェクトの勉強会がはじまっております。このように、少しずつ、輪がひろがりながら、庄内プロジェクトは着実に進んでおります。また、少なくとも、これまで庄内プロジェクトにのった患者さんの家族からは高い評価を受けております。施設完結型の医療から、地域完結型の医療へと鶴岡市は変わろうとしています。その成功のためには、多くの職種の人たちの連携が必要です。是非、みんなが手を取りあって、相互に理解し、研鑽しながら、鶴岡市をがん患者さんにとって、あたたかい街、優しい街にしたいと思っております。

「みんなができることを、できることから始める」

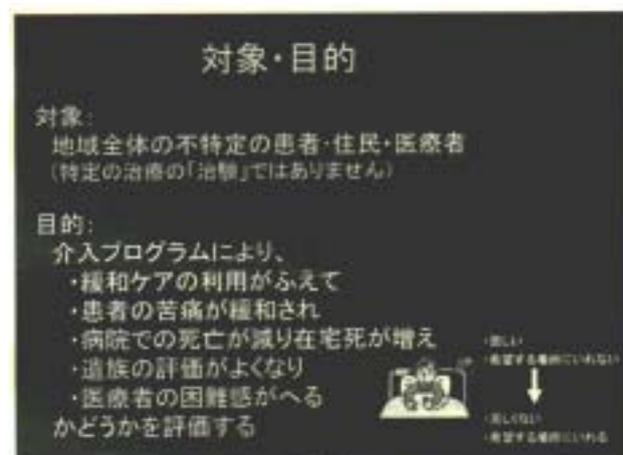


表1

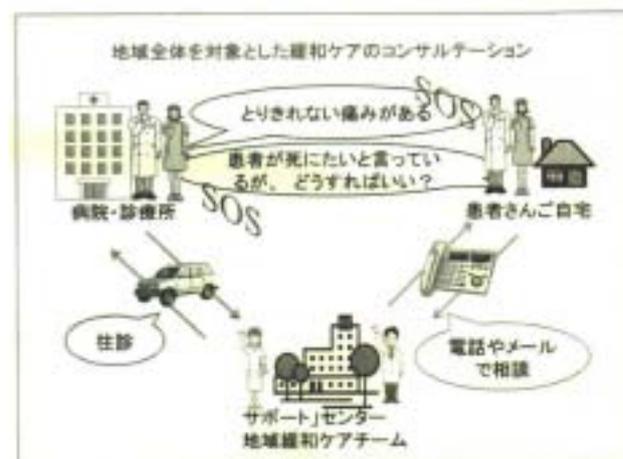


図1

私のお勧めの店 その35

横山 靖

8月のお盆も終わった17日の日曜日の午後、羽田空港の庄内便の待合所で黒羽根洋司先生とパツタリ会った。黒羽根先生はお盆休みを利用して琵琶湖周辺の史跡を巡られ、その後東京に移動し美術館やフェルメール展などを訪れたそうである。その旺盛な好奇心や知識欲には驚かされ、また先生の博学な知識を裏付ける秘密の一端を知ることができたように思った。本当にその行動力には頭が下がる思いである。それに比べ私の方はといえば、叔母を見舞いに大阪まで行ってきたのだが、大阪城や姫路城に行くでもなく、六甲山に登るでもなく、ただただおいしいものを食べてきただけである。黒羽根先生の高尚な時間の使い方と比べたら、まったくお恥ずかしいようである。まあ、食べることが趣味だから仕方ない。

さて、何を食べたかといえば、まずは鰻である。大阪で言う、いわゆるマムシ井である。鰻は、東京は背開きで大阪は腹開きというのはご存知な人も多いだろう。まあしかしこれはさして味には影響しない。鰻の調理法でもっとも異なるのは、東京では蒸してから焼くのに対し、大阪は蒸さずにそのまま焼く。この違いは大きい。東京の鰻は蒸しているののでその間に脂が落ちるし、とろけるように柔らかい。それに対し、大阪の鰻は身がプリプリして、脂が乗っていて野性味がある。ご飯も、東京はタレをかけるという感覚なので、ご飯は茶色の部分と白いご飯が斑状になっているが、大阪のご飯はすべての米粒が茶色になるまでタレとご飯を完全にまぶしてあり、一粒一粒の米粒にタレの旨さが滲みている。どちらも旨いが、大阪風はこちらでは味わえないので、大阪に行ったら鰻はかならず食べる。それからキツネうどんもかならず食べる。白く透明なダシの効いたお汁に甘〜い油揚げも、こちらでは味わえない。たこ焼きも食った。もちろん明石焼きも食った。ハモも終わりが近づいてきたが、ハモも京都のようにお

上品には食べないらしく大阪のデパ地下に行くとハモの蒲焼が山のように置いてある。そしてこの蒲焼がどんどん売れてゆくのである。もちろん、私も買った。うまかったし、また食べたいと思うが、しばらくは大阪には行けないのが残念。

さて今月だが、そういえばつけ麺はまだ書いていなかった。鶴岡はつけ麺を出す店が少ないように思うせいか、私がお勧めするのは酒田の『新月』さん。最近、場所が変わり、今は酒田市のこあらに移った。なにせ、ここはラーメンもとても旨い。このうまいラーメンの極上の醤油スープに酸味を利かせたつけだれは絶品である。さらに細い縮れ麺がつけだれによくなじんで、すこぶる美味である。もういくらでも食べられる感じ。最後にラーメンスープとわかめを足してワカメスープにしてくれるサービスもある。残念なのは日曜日が休みなので、鶴岡からは少し行きづらいかもしれない。平日も混んでいるが、祭日ともなれば行列ができていますので、お昼時ははずした方がいいだろう。

新 月

住所 酒田市こあら2-6-3

TEL 0234-26-0141



表 紙

「草紅葉とエゾオヤマリンドウ」

石 原 融

9月下旬、鳥海山や月山では木々の紅葉はまだですが、草紅葉が始まっています。エゾオヤマリンドウはこの時期でもまだ花を残している高山植物の一つです。さすがに盛夏のような鮮やかな色彩は失せていますが、草紅葉の中では青紫の花が目を引きまます。撮影場は鳥海山河原宿です。

～ 編集後記 ～

渡部 隆二

花火大会だ、盆休みだ、オリンピックだ、と騒いでるうちにあっという間に夏が過ぎていきました。暑い暑いといいながらも夏が過ぎ行く毎年今頃は、なんとなく寂しい気持ちになるのは私だけでしょうか。

さて、今月号から庄内プロジェクト関連の連載がスタートしました。今年度より本格始動した同プロジェクトは在宅主治医となる開業医の先生方のご参加、役割が非常に重要であり、その現状や活動内容を広く会員の先生方に知っていただきたいという趣旨からです。今後数回にわたり関連する各業種の方々から現在の活動状況等につきご報告いただく予定です。

巻頭の勉強会抄録は、鈴木先生の「やさしい分子遺伝学入門」。分子遺伝学というと、臨床医にはなかなか取り付きにくい印象がありますが、「クローニングとはなにか？」という基本なお話から始まり、遺伝子解析の臨床応用に至るまで、ユニークな例え話なども盛り込んだ、分かりやすく楽しい講演でした。誌面ではその面白さが伝わらないのが残念です。

最近、医師会主催や医師会後援の勉強会への出席者が減少傾向にあり、我々、学術広報委員の悩みの種であります。勉強会は、専門以外の医療分野の最先端の情報源として、また、専門分野の brush up の手段として、いろいろ参考になる点は多いと思います。講師の先生方も専門外の方でも理解しやすいようにと、工夫されておられるようです。また、会員の先生方が出席しやすいように、講演の開始時刻や内容についての検討も必要と考えておりますので、ご要望、ご意見などありましたらぜひ、お聞かせください。

編集委員：中村秀幸・伊藤末志・福原晶子・斎藤憲康・小野俊孝・渡部隆二

発行所：社団法人鶴岡地区医師会 山形県鶴岡市馬場町 1- 34

TEL 0235- 22- 0136 FAX 0235- 25- 0772 E-mail tsurumed@mwnet.or.jp

URL <http://www.mwnet.or.jp/~tsurumed/>

印刷所：富士印刷株式会社 鶴岡市美咲町 27- 1 TEL 22- 0936(代)